

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 12章27節～13章13節

12 ²⁷あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。
²⁸神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。²⁹皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。³⁰皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。³¹あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

13 ¹たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。²たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。³全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。⁶不義を喜ばず、真実を喜ぶ。⁷すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

⁸愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、⁹わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。¹⁰完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。¹¹幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。¹²わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

【福音書日課】マルコによる福音書 12章28～34節

²⁸彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。³⁰心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」³²律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。³³そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」³⁴イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

神を愛し、隣人を愛する【こども説教のために】

日曜日ごとに教会の礼拝に招かれて、そのたびに『聖書』の説教を聞き続けていると、退屈に思うことがあるかもしれません。いつも同じような話がされているようだからです。残念ながら、それは本当のことです。主イエスが『聖書』の教えをただ二つにまとめてお教えになられたからです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（申命記 6:5 より）

「隣人を自分のように愛しなさい」（レビ記 19:18 より）

主イエスは、「この二つにまさる掟はほかにない」とおっしゃられました。神を愛すること。隣人を愛すること。ほかのさまざまな教えも、最後にはこの二つの掟に照らして教えられる、というのです。どちらかだけではなく、この二つの両方に照らすのです。

主イエスの教えを直接聞くことがなかった使徒パウロも、そのことを弟子たちを通して知っていたのでしょう。今日の手紙でパウロは、「あなたがたに最高の道を教えます」と言って、「愛」について説きました。「愛する」とはどういうことか、記しました。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして愛するとはどういうことか、言葉を尽くして書きました。自分のように愛するとはどういうことか、思いを尽くして書きました。

大切な教えは二つ、いいえ、一つだけ。「愛する」こと。けれども、どうすれば愛することができるか、それに答える言葉は、一つではありません。わたしたち一人ひとりが、そのときごとに主イエスに倣って答えるのです。「主イエスならばどのように愛されただろうか」と問うて、答えるのです。

最高の道

今夏、わたしたちは、毎週のように国内外で発生した大きな災害の報せを胸に抱きつつ、主の日の教会へと呼び集められて来ました。わたしたちの教会では、先週からようやく、二カ月前にベネズエラで発生した大地震のための救援募金を開始したばかりですが、その後に発生した災害に対しては、ほとんど何も対応できないまま、手をこまねいている状態です。

前任地の教会では、8月最後の日曜日と3月に「防災デー」と称して、地元町内会と合同の防災訓練をしていました。主日礼拝後、避難訓練や非常食の炊き出し訓練をし、近隣住人と共に防災意識を高めることを目的としていました。元々は9月1日の関東大震災を記念した「防災の日」に合わせて実施するようになっていたもので、その後、2月の教会創立記念日にも「冬の防災デー」として重ねて実施していた行事ですが、東日本大震災の後からは8月最終日曜日と3月第二日曜日に定めて行うようにしていました。

もともと、10年経った今は、どうしているのかわかりません。行わないようになっているとしたら、それは時代の変化なのでしょう。国内外であまりに頻繁に大きな災害が発生している昨今、年に一度か二度だけ防災意識を高める行事を行うというようなことでは、到底、現実に対応しきれないからです。日々、自分たちの地域を大災害が襲ってくるかもしれないという危機意識が必要なのです。

それは、教会も同様でしょう。ひとり教会だけは、災害から無縁でいられるとか、たとえ災害が起こっても特別な対応をしなければいけないようなことはない、とは言えないのです。災害時など危機のときにこそ、教会の本質が問われ、姿勢が問われ、わたしたちの信仰が問われることになるからです。

使徒パウロが「**最高の道を教えます**」と言って述べている「愛の教え」は、結婚式の際にも朗読される御言葉です。「愛の讃歌」と呼ぶ者もいます。けれども、これは決して、ロマンチックな愛を称揚するような教えではないでしょう。パウロはこれを、人の集まりである「教会」のあり方や、土台とすべき姿勢を教えるために記したのです。

パウロがこの手紙を書き送ったコリントの教会は、大きな組織が出来上がっていたようです。教会に連なる人々には、さまざまな役職や役割が割り当てられていました。異なる賜物を与えられた者たちが、それぞれに自分の専門分野、得意分野を生かす場を与えられていたのです。小さな教会では考えられないほど、組織として整えられていたのでしょう。多くの者が、自分の能力を最大限発揮する機会がありました。けれども、どこかうまくいっていませんでした。ぎくしゃくしていました。「体」がバラバラでした。

愛は忍耐

平日の教会堂においてになって、礼拝堂でひとり祈り、黙想して帰る方があります。信者とは限りません。寺院や神社ではなく、教会の礼拝堂を祈りの場として選んでくださっているのです。確かにここは、聖なる場所なのです。ここで、先達が途絶えることなく神の御前に祈りを重ねてくれました。わたしたちは、それを受け継ぎ、更に祈りを重ねていこうとしています。たとえ立派な大聖堂でないとしても、ここは確かに、神の御前に進み出るために与えられてきた聖なる場所に違いありません。それを知ってか知らずか、ここを一人祈る場として選んでくださっている方がいるのです。

けれども、そのような方が日曜日の教会の営みにおいてになられとは限りません。信者でない方は、一人祈るために礼拝堂を訪ねて来られることはあっても、日曜日の教会の営みには来られないことが少なくないのです。それは、人の集まるところの現実を知っているからなのかもしれません。そこには、世の中と同じように、人間関係があります。組織の問題があり、経済的な課題があります。そこに見えてくるのは、教会の「聖なる」側面ではなく、「俗なる」側面なのです。日本人の多くは、宗教そのものに関心を持っても、宗教団体という営みに対しては醒めた目で見て距離を置いていると言われます。宗教の営みのなされるところに入り込んで来る世俗的な現実を、厳しく見分けているのでしょう。それならば、そういう人間関係が生ずるような営みはできるだけ避け、組織の問題や経済的な課題が生じるような事柄も可能な限り小さくしておくべきでしょうか。

そうはしない、というのが、教会が受け継いできた態度です。主イエスの弟子たちが教会という営みの中で示してきたことです。それは、主イエスが弟子たちを従わせ、寝食を共にすることを通して実践されたことなのです。

「主なる神を愛する」という聖なることだけでなく、「隣人を自分のように愛する」という俗なることを、主イエスは弟子たちと共に実践なさいました。

災害の報せを聞き、いつか自分たちも災害のただ中に放り込まれるかもしれないという意識を抱く中で、「愛すること」が問われています。

それは、何かを為すことなのでしょう。実際にわたしたちの手を差し伸べることなのでしょう。ただし、それがすべてではないかもしれません。何かを為すのではなく、忍耐し、情け深くあること。礼を失しないように最大限の配慮をすること。自分の利益を後回しにすること。苛立ちや恨みの思いを覆い隠すこと。それも「愛」の姿です。パウロの教える「愛」は、相手に押し付けけないのです。押し売りをしないのです。ただ、受け入れるのです。そうであればこそ、「愛」は枯渇することなく、いつまでも残り得るのです。